

## 西鶴と遊女と百物語

——『諸艶大鑑』巻二の五を視座として——

森 田 雅 也

### 一、はじめに

西鶴の大坂新町を舞台とした『諸艶大鑑』巻二の五「百物語に恨が出づる」は、本来、武士の度胸試しであった「百物語」が遊女の世界でどのように受け入れられていたかを示す、興味深い作品である。

そのためには、「百物語」が当時、どのように行われた民衆の習俗であったかを分析して以下を論じるべきであるが、その研究は文学とは別した分野の研究として言及を避け、ここでは大坂新町での「百物語」だけを対象として考察したい。その場合のキーワードが「西鶴」、「遊女」、「百物語」であって、これら三つの微妙な双方向性ともいえるバランスが西鶴文芸全体に関係していることを述べたい。

ここで、西鶴の『諸艶大鑑』「貞享元（一六八四）年刊」全体について一言断りたい。すなわち、表題が『好色二代男』ではないのかという問題である<sup>①</sup>。

『諸艶大鑑』は副題が『好色二代男』のために、どうしても『好色一代男』との関係で、その成立論に目が向いてしまう。しかし、どのように論じても『好色一代男』の続編としての共通性とその束縛を振り払った獨創性

の両面を個々に探し当てるだけに終始しかねない<sup>(2)</sup>。

としたように、その論議は避けられないであろう。しかし、本稿では、

『好色二代男』で世之介が六角堂の門前に捨てた子供を世伝として首尾二章に登場させ、この物語全体を世伝が遣手の老女から諸国遊里の諸分を聞き書きするという趣向としている。その点からは『好色二代男』と呼べるが、個々の話の実質は、三都の遊里を中心とした遊女と客の織りなす手練手管の話が主軸であるから、内容からは『諸艶大鑑』と呼ぶ方がふさわしいであろう<sup>(3)</sup>。

という見解から、『諸艶大鑑』として以下論じたい。

## 一、「諸艶大鑑」巻二の五「百物語に恨が出る」の方法

『諸艶大鑑』巻二の五「百物語に恨が出る」の梗概は以下である。

大坂新町の遊女屋はどの家にも言葉の癖があるが、些細なことは人も許して欲しいものだ。だいたい遊女の身ほど悲しいものはない。借錢になる内証遣いも多く、客の扱いや客への手紙など苦勞の種は尽きない。そんな遊女勤めのせわしさを嘆き、嫌気がさしても、そんなことはすぐ忘れて傍輩との世間話に花がさく。吉田屋の喜左衛門の話として、女郎の轆轤首うらくろくびが鮎堀いたちほりのくずれ橋に出た話を聞くと、今夜は徹して百物語をしよう、いろいろな物語を百以上もするが、いっこうに怪異現象が起こらない。そこで話は次第に変わり、わが身の上の恐ろしいことや、人を騙した事など語り出した。いろいろな話にさしもの遊女たちも反省し、涙を流しているところに、遊女に騙された人々の姿が幻となって現れた。詫び言が通じなかった怪異も、物賢い女郎の「各々揚屋の算用の残りは」の声で、たちまち消え失せたということである。

このように見れば、この章は「百物語」を中心とした話というより、遊女の慣わし、遊女勤めの辛さ、悲しさ、客に対する手練手管、遊女と客との関係など、色々な遊里の実態を遊女側から暴いた話として読むところに面白さがあるといえる。元来、中村幸彦氏が『諸艶大鑑』を定義して、

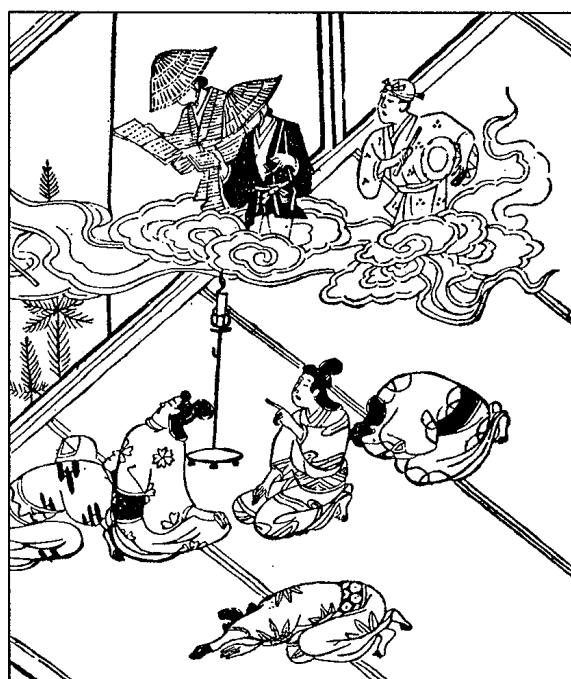
『諸艶大鑑』の内容は、簡単にいえば、『一代男』の後半、名妓達の逸話の一種の延長と見てもよい。「一種」と称するのは、より西鶴に近い頃の遊女達の、逸話とは一概に称せない、善悪様々の噂や評判からなっているからである<sup>(4)</sup>。

とされているように、『諸艶大鑑』全体の特徴をもった代表的な話と言ってよい。

しかしながら、後に述べるように、この章では遊里の一般的な話というよりは、特に大坂新町の遊女の実態を読者側に伝えようとする作者西鶴の意識的な方法が顕著であると言えるのである。さらに言えば、読者が大坂新町を熟知していることを利用して、その裏話を伝えようとしているのではないかと考える。

『諸艶大鑑』は、『好色一代男』〔天和二（一六八二）年刊〕

西鶴と遊女と百物語



巻二の五「百物語に恨が出づる」挿絵

に続く、西鶴浮世草子第二作目である。『好色一代男』の人気を承けて、「はじめに」でも指摘したように『好色二代男』として書かれた作品である。江戸版『好色一代男』こそ『諸艶大鑑』と同じ貞享元年に刊行されているが、好評がどこまで本物か、その結果が十分にわからないまま、「大坂呉服町真斎橋筋角 書林 池田屋三郎右衛門」から出版されたわけであるから、後の三都版となる西鶴本と違い、大坂を意識する態度に特異性があつたとしても不思議はあるまい。

そうなると、いわばこの話は、近世後期の「通」の世界を大坂新町の場で見せようともしているといえるのである。その仮定を裏付ける事実として、たとえばこの章の前半で、

其家の姉女良のまねをするにや、聞きとがむれば、定まつてくせあり。新屋の「あ、しんき」、木村屋の「白癩」、扇子の「あ、ゑず」、八木屋の「つがもない」、金田屋の「名利」、明石屋の「うるさ」、丹波屋の「無下ない」、藤屋の「てんと」、堺屋の「下卑た」、松原屋の「気の毒」、伏見屋の「にくやの」、塩屋の「それとても」、京屋の「何が扱」、大坂屋の「みぢん」、住吉屋の「今にかぎらず」、槌屋の「けりやう」、湊屋の「神ならぬ身」、茨木屋の「そもや」、此外遣手・禿までも、口ぐせあれども、書につきず。大かたの事は人も見ゆるせかし。と記述するが、このような言葉癖の話は楽屋受けに近い素材で、大坂新町のなじみの客、「通」に寄せたメッセージではないかとも考えるのである。わざわざ、根拠のない言葉癖を何々尽くしのようにあげたところで、当時の読者は納得をしないであろう。むしろ、この部分は、大坂新町の「通」たちが横手を打って、その言葉癖に思い当たり、にんまりする箇所ではなくては意味がない。これが「嘘」では、この章から読者が離れていく危険性さえあるのである。もちろん、それは『諸艶大鑑』全体への不信感ともなりかねないものないことを考えれば、西鶴は大きな冒険に出ているのである。

この言葉癖は、この章になくは後の筋に支障をきたすものではない。「鶏肋」どころか、意味のない無用の箇所

である。そう考えるなら、この言葉癖の部分は、読者の期待の地平を刺激する小道具として、西鶴が用意した挑発の箇所ともいえるのである。

それでは、この章はそんなにも「通」に寄せたりアリエー溢れる話なのであろうか。その点を右の当時実在の遊女屋と大坂新町との関係で明らかにすることは、すでに先人が『色道大鏡』などを用い、注釈として指摘してこられたことなので、その一々をあげない。ここでは遊女の視点から考えたい。

言葉癖に続いて、次に話は、「遊女の身程、大事に悲しき物はなし」として、遊女勤めの愚痴が羅列される。まず、

請覆す酒にうわがへの妻もいとわず、大奉書を用捨もなくつかはれ、町からの太鼓持ちにさし櫛をとられ、なじみもなき男に、ひつしごきの帯をもらはれ、揚屋に子が出来たの、旦那の娘が嫁入せらるゝの、見もせぬ芝居の請棧敷があるの、お寺に地藏堂が立つのと、皆借錢の内証づかひ。

とする。こぼされた酒で着物が汚されたことから始まり、次々と勤めの外の想定外にかかる物入りを遊女の立場で嘆いて見せる。滑稽に思えるほどの愚痴であるが、「皆借錢の内証づかひ」と結ぶように、借金ゆえに苦界に縛られる遊女にとっては、切実な思いの出費なのである。一方、これらの金に身銭を切ることは、いい遊女と呼ばれる嗜みであり、遊女としても、怒りのやり場がない。これに続いて、遊女は客の前では物を食せない習わしから、時折、小鴨の味や鯉の糸作りが食べたたくてもがまんすることや、三つ葉の吸い物にせせるように口をつけることや、揚屋の納戸で食すご飯と浅漬けのことなどが続く。

いずれも、詳細を示されてはじめて「遊女の身程、大事に悲しき物はなし」と一々納得させられる話であるが、いずれも大坂新町に特定される事柄ではない。

滑稽話ともいえる愚痴に続いて、「上戸には無心も云よけれども、座敷が長し」とした後、好まぬ客筋の愚痴が続

く。これも大坂新町としての特異性ではないが遊女の視点からユーモラスな悲哀話は続く。凜とした遊女の姿を思うとき、これらの話はあまりに人間臭く意想外である。この遊女の日常を暴露することで、読者の耳目をひき、物語世界から離れさせないのは、西鶴の一つの方法といえよう。そのような方法で読者を捉えたまま、話は次に「百物語」が語られることになるのである。

### 三、「百物語」とその挿絵の効果

遊女たちは嫌な愚痴話を忘れて、噂話に花が咲き、「百物語」を楽しむこととなる。

傍輩の女良あまたに、中間の焼炭二人あいの薬罐を掛けて、是もたのしみの伴ひ、「けふ吉田屋の喜左衛門咄し、き、やつたか。其女良の名はいはれぬ事、《甲》まくらくび轆轤頸のぬけて、鼈堀のくづれ橋にでて、其夜あはんす、新うつぼ町の今津さまにま見へ、其身は何の覚へもなく、床に寝顔のうるさく、此女良やめぶんにあそばしける」と云ふ。「近付彼岸の入り、涅槃・廿二日の事こそ、こはけれ」と、売日のつゞくに物思ふ。

「今から寝られもせぬ夜半なれば、百物語初めて、何が出づるぞ、ためしに」と、年明前の女良の、しかもふてきない人、座をしめて、小橋の井戸へはめの子どもが歎き、人くひ祖母ばばのむかし、大和の《乙》うぶめ孕女のはなし、彼是取まぜて、物語は百にも勝れども、何のしるしなし。

ここで実際に当時の大坂新町の遊女屋、もしくは全国の遊里であれ、遊女仲間や遊興の席で「百物語」が盛んに行われたかどうかは問題ではない。むしろ、西鶴が遊女の口から当時の大都市大坂の怪異、いわば都市伝説<sup>(5)</sup>を語らせている方法に注目できる。

『諸艶大鑑』と同時代の「百物語」の実情を知る一資料として、山岡元隣の『百物語評判』〔貞享二（一六八三）年

刊」があげられよう。この書は山岡元隣に弟子たちが所々で存在する怪異現象の正体を問答するという形で、「百物語」が語られる怪異小説である。弟子たちの聞き書きに元隣の息子元恕が手を加えて出版したこの書は、当時語られている「百物語」の実態を知る好テキストと判断する。

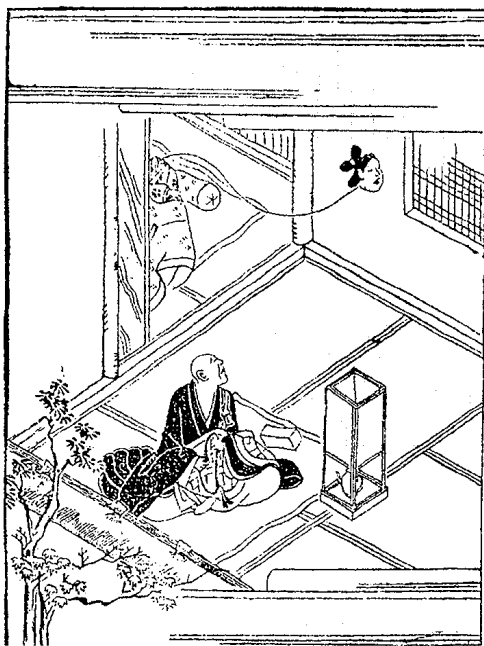
以下、前述した「百物語」の怪異について『百物語評判』でもあげている二つの話について、挿絵と共に検討したい。なお、『百物語評判』の解説は寺敬子氏の手による<sup>(6)</sup>。

《甲》 卷一第二「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」

〔梗概〕 参会者の一人が語るには、絶岸和尚という僧が肥後のしころ村で轆轤首を目撃したという。投宿したあばら屋で和尚が夜中まで念仏を唱えていたところ、その家の女房の首が体から抜け、窓の破れから外に飛び出していくのが見えた。その首の通ったあとには白い筋のようなものが見えたという。明け方になるとその筋が動き、首は元の場所にかえった。翌朝女房の首を確認すると筋がついているだけで別段の違いは無かったという。

この轆轤首というものの仔細を参会者が而慍斎先生に尋ねると、先生は博物志や輟耕録といった中国の書籍に載る例を挙げ、轆轤首を「造化の変」によるものだと結論付けた。

〔挿絵〕 絶岸和尚が轆轤首を目撃する場面。寝具の上で念仏を唱える絶岸和尚。僧衣を纏い手には数珠を持っている。傍らに行灯、下段には油差し。奥の間の茵には女房の胴体だけが横たわっており、抜けた首が糸を引きながら絶岸和尚の傍らを通り過ぎている。



卷一第二「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」

## 《乙》卷二第五「うぶめの事付幽霊の事」

「梗概」うぶめはお産で亡くなった女の執心が形となったものだというが、人が死んだ後に他のものに変ずるとはどのような道理か、参会者の一人が質問する。而慍齊先生は『玄中記』や『本草綱目』にある「姑獲鳥」がこのうぶめであるとして生態を説明し、唐土の書に詳しく書かれる以上、うぶめは実在するのだろうかとする。気化形化の名義によって、産婦の体から鳥が生ずることも有り得ると述べた。さらに一人が質問するには、人の死後にその魂魄が消え失せるならば、なぜ戦場の跡に人の泣き声が聞こえる話や、あるいは彭生の幽霊の話などが儒書に見られるのか。先生はこれに答えて、人の魂は人が死ねば散り失せるのが常であるが、まれにその気が残ることがあり、これが彭生のような幽霊であると説明する。なおこの世の形あるものは全て「気」が滞ることから生じており、幽霊もまた死者の残した気が滞り、形や声を成したものだとして解説する。人はこの世に執心を残さないことが大事であると戒めた。

〔挿絵〕うぶめの図。うぶめは白装束を着、腰より下は血に染まっている。手には杖。背景に墓と卒塔婆、松が見える。右下にはうぶめを目撃し、驚いて逃げる尻はしより姿の若者が二人。

《甲》「轆轤頸」の場合、まだ「百物語」の話をする前に提示された怪奇話であるが、右にあげた『百物語評判』と符合する。九軒町の揚屋「吉田屋の喜左衛門咄し」としてある女郎の「轆轤頸のぬけて」とあるが、それは首が胴体を離れたということである。後の江戸時代の見せ物小屋などでイメージする六尺の首長女の造形とは異なっている。さらに、その首だけが飛んで「馳堀の



卷二第五「うぶめの事付幽霊の事」



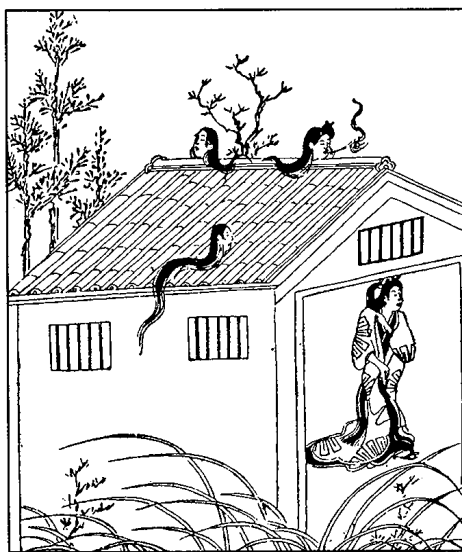
くづれ橋にでて」「新うつぼ町の今津さまにま見へ」たわけである。しかも、胴体は「其身は何の覚へもなく、床に寝顔のうるさく」と寝床を動いていない。まさしく、『百物語評判』と同様の飛行する首の話である。飛行する首の怪異は同じ『諸艶大鑑』巻四の三「七墓参りに逢ば昔の」にもある。

また『乙』『孕女』は、難産で死んだ女の幽霊として人口に膾炙しており、『百物語評判』でも、地域を限定していない。『諸艶大鑑』で「大和」としているが、奈良にのみ伝わる怪異ではない。西鶴も『好色一代女』巻六の三にも登場させている素材なのである。

偶然ながら「ろくろ首」「うぶ女」の化け物は、現在の怪異としても生き残り、スタンダードナンバーともいえるものであることは衆知のことであろう。ただ、生き残ったという点から推測すれば、当時もインパクトが強い化け物ではなかったであろうか。

いずれにしても、西鶴はここで当時の読者がよく知る幽霊話をあげて、いかにも「百物語」をしたという呈にしている。ところが、『諸艶大鑑』で語られている「百物語」の内容は「孕女うぶめのはなし」を除けば、

「井戸へはめの子ども」や「人くひ祖母のむかし」の他は「彼是取まぜて」としてしまい、全貌が明らかではない。その「井戸へはめの子ども」や「人くひ祖母のむかし」にしても、幽霊、または化け物としての特殊性が薄いことは否めない。その怪異としての造形よりもそのような化け物となった経緯が話の中心となったことは容易に想像でき



『諸艶大鑑』巻四の三「七墓参りに逢ば昔の」の挿絵

る。そうなれば人生話となり、誰でも怪異話が容易に創作できるのではあるまいか。いや存外、「百物語」とは、この程度の物で人生の哀歓のある話が主流ではなかったかと考えたくなる。

しかし、西鶴は読者を離さない。挿絵にインパクトの強さがあるからである。

『諸艶大鑑』すべての挿絵を見ると、前作『好色一代男』のそれとは比べものにならないほど挿絵の作成に力を入れていくのに気づく。本文との連動の良さでもあるが、群衆描写というか、一面の挿絵に登場する人物の多さは、後の西鶴作品と比しても群を抜いているのではなからうか。それが言い過ぎなら逆に、後の武家物などで敵討ちを描くとき、乱闘の場に多くの人物を配する挿絵の描き方は『諸艶大鑑』の遊女の群衆描写に範をとったといえるのではあるまいか。

ただ、この章の挿絵では遊女たちがひれ伏している。恐怖に怯えているとも見えよう。そしてそれよりも目を引くのは、読者の興味を刺激する得体の知れない魑魅魍魎あるいは幽霊の類を多くである。この挿絵を見るだけで、この遊女の「百物語」の結末に興味を持たせているのである。しかし、その挿絵もよく見れば、後に出版する『西鶴諸国はなし』巻一の五「不思議のあし音」にある、目の不自由な一節切の名人が言い当てる鳥足の高足駄を履く修行者の挿絵まで混入しているなど怪異とはほど遠い人物が多いのに気づく。この挿絵については平林香織氏<sup>(7)</sup>は

新町の遊女の百物語の折、女郎たちに騙されて財産をなくして落ちぶれた男たちの亡霊が、恨みを訴えるために出現し、遊女たちが恐れおののいているところ。

と解説されておられるが、「百物語」のあと、後述するように文脈に一致した零落した大尽たちの姿が描かれている。それは読んだ後に知るのであって、当初は章題から、「百物語」の挿絵と思うであろう。たぐさんの幽霊や妖怪がひしめく挿絵の描き方は、西鶴作品の中では『好色一代男』巻四の三「夢の太刀風」の挿絵が最初であろう。個々の怪異の造形は『好色一代男』の方がすぐれているが、集団的な迫力という点では、『諸艶大鑑』の方がまさっている。

るであろう。これは後の『世間胸算用』巻三の四「神さへお目遣ひ」などでも確認する西鶴挿絵の方法であろうが、このような描き方をすれば、群衆とも集団とも言える多数の話が想起できるという効果があるのではなからうか。ただ、挿絵画家と作家との関係が不明なままでは、これ以上の言及は避けねばならないであろう。

いずれにしても、「百物語」というキーワードは、章題にまであげながら、物語としては、化け物または幽霊らしい話が物尽くし的にあがっている章ではないことがわかる。

それでは、何のために「百物語」が語られたのであろうか。

実は章題は、「百物語に恨が出る」なのである。つまり、「百物語」をしたことで「恨」が出たのである。そう考えれば、「百物語」は読者を誘うための一語であり、これも西鶴の物語世界から離れさせない方法の一つといえよう。

その「恨」とはどのようなものか。次節で確認したい。

#### 四、遊女と「百物語」

「百物語」は進み、「物語は百にも勝れども、何のしるしなし。」ということから、「百物語」に飽きてしまい、「次第に咄し替りて、身の上のおそろしき、人をだませし事ども」を話しはじめるのである。

本来、「百物語」は百の怪奇咄を行うと、怪異現象が起こるとして、それ以上は話さないものである。西鶴の『武道伝来記』「貞享四（一六八八）年刊」巻五の四「火燵もありく四足の庭」では、「百物語」の緊迫感を以下のように描いている。

「何と化物の出づる百物語とやらをはじめては」といへば、「是一興たるべし」と、行燈かすかに、帷子を打懸、火燵も取りて退<sup>のけ</sup>、各々座をしめ、「むかし虚屋敷<sup>あき</sup>に」と云ふ程の事おそろしく、目に見ぬ鬼も佛に立ち、は

なしの六、七十もすむ比より、透間漏る風も、それかとおどろき、片隅にゐたる男も、次第ににじり出で、天井に鼠の噪ぐも、雷のおちかゝるかと思はる。屋ねを物めがありくやうに聞こへ、もはや九十七、八にかたりつめたる時、皆々面の色を違へて、五人一所に鼻を突合せ、今は一つに極まりたるにぞ、目を見合せ、手に汗を握り、<sup>ちりけ</sup>身柱もとより何ものやら掴みたてると、……

武士たちが何気なく始めた「百物語」であったが、「はなしの六、七十もすむ比」から、怪異現象の兆候があらわれ、恐怖が頂点に立った九十九話終了時に「何ものやら掴みたて」たのでたまらない。この怪異現象に皆が刀を抜いてパニックとなるが、その家の主が見事怪異の物を仕留める。ところが、その正体はその家の犬であったために次第に人々の間で物笑いの種となる、その後は臆病の噂をまいた武士に対し、武士の意地から果たし合い、仇討ちにまで展開するというものである。

恐れ知らずのはずの男たちの最強集団武士たちでさえ、九十九話目で百話目で起こるとされる怪異現象にたまらずパニックになり、後に人殺しまでに発展しているのである。

それに比して、遊女たちの中に「年明前の女良の、しかもふてきな<sup>ふてきな</sup>」（不敵ない＝大胆不敵な）人<sup>ひと</sup>がいたにしても、遊女たちが堂々と「物語は百にも勝れども、何のしるしなし。」とする肝の太さには驚嘆せざるを得ない。『武道伝来記』よりも先に『諸艶大鑑』が刊行されているにしても、もうすでに当時の武士たちの世界で「百物語」が盛んに行われていることは衆知のことである。この遊女たちの「百物語」の描き方は、身分制の頂点に立つ武士を嘲笑するがごとき、西鶴のアイロニーとも言えるのである。

そして、「次第に咄し替りて、身の上のおそろしき、人をだませし事ども」を話すという趣向は懺悔話である。しかし、これらの懺悔話は遊女の本性が傾城、傾国という客から全ての財を巻き上げることにあるなら、遊女が語る悪漢（ピカレスク）小説ともいえよう。

今思へば、千日寺にさるかたさまの、石塔を立つる奉加の大分あまるを、身あがりにさしづき、又は長門の助さまに、切もせぬ外ほかのかもじをやりてのぼらせ、くだる事はならず、いとしや、堺山の口に、夜番をして、浦風がさぞ」と思ひやる。

ここまでは、石塔を建てるために集めた奉加金を身揚げりの金につき込んだ話。自らの変わらぬ愛の印としてかもじを贈りながら、それは実はいかがわしい方法で入手した他人のかもじで自らの髪は切っておらず、そのかもじの威力で男を夢中にして騙したあげく、男は零落して夜番として暮らしているという話。いわば、まだ序の口の懺悔話である。

「それよりは、肥後の久さまこそ。秤・十露盤をも一代手にもたず、人さへ五十人もつかはれし身が、お内義さまとは別れ、今は高原のほとりにましまして、龍頭たつがしらをかづき、あつた大明神さまのお初尾を、申請にあるかしやると、聞くも悲し」。「金屋かなやの七さま・八さまお兄弟は、家も質に流れて、それより松屋町とやらに引込み、夜さへ編笠を着て、つれぶしの読うり、うはがれ声のかくれないと、聞いて来た人もあり」。「嶋田屋の善さまは、四百貫目、弍年にははやう埒があいた。常には虫もふまぬかたさまなれども、世渡りとして、すぼん突になつて、天満におはしけると云ふ」。「長堀の木さまが見へぬとおもへば、勘定があわぬとて、親方目がしばつて、僉義をするといの。『其銀は落しました』と、いはんしたら、つひすまふに、扱」。「津村の茂さまは、入聲の所を追出されさ、んしてから、よもや心太売はなされまいとおもへば、案のごとく、天王寺の南門で、行人になつて、後の世をふかく願ひ給ふとや。こりやもし、よい大臣に生れ替らしやんして、おれが又前の世で、傾城してあふ事も、是には少し頼みがあるなり」。

語られる懺悔話は、前節と違い、急に大阪新町らしいローカルな話となる。「肥後の久さま」という大尽が零落し、「高原のほとり」(大阪市中心区瓦屋町付近)で「龍頭(たつがしら)」をかぶり、生活している話。「金屋かなやの七さ

ま・八さまお兄弟」という大尽たちは零落して、家も質に流れ、「松屋町」(大阪市中央区)で二人連れ節で瓦版の読み売りをしているという話。「嶋田屋の善さま」という大尽は二年で身代を使い果たし、大坂の「天満」で「すぼん突」になったという話。「長堀」(大阪市中央区)の「木さま」という大尽は店の金に手を出し、「親方」にしぼられ、その後がわからないという話。「津村の茂さま」は悪所通いが過ぎて「入聲の所を追出され」大坂の「天王寺の南門」で「行人」になっているという話。いずれもそのまま、忠実に挿絵に描かれている。挿絵と大尽たちとの詳しい照合は、前掲の平林香織氏の解説や『新編西鶴全集』<sup>(8)</sup>等に譲りたい。

「肥後の久さま」は、『好色一代男』巻七の五などにある肥後米を商う肥後衆の一人であろうし、金屋は福井藩の豪商でもあるが、『日本永代蔵』巻四の二の長崎商いの金屋などにも見える全国的な屋号と言える<sup>(9)</sup>。いずれも当時羽振りの良い商人で、廻船を利用して大坂を活躍の場としていた。大坂の新町の大尽として現実味を帯びた廓での呼び名に設定している。モデル小説として詮索したくなるほどのリアリティがある。「嶋田屋の善さま」「木さま」「津村の茂さま」は不明であるが、その点を地域的な話でもっともらしくしているのである。遊女たちにとっては、「百物語」の「井戸へはめの子ども」や「人くひ祖母のむかし」などより、よほど面白い話であったと想像できる。

このように西鶴は「百物語」をトピックとしてあげたものの、懺悔話を中心にして、この章を仕上げているのが了解できる。しかも大坂新町らしさを出した話となっているのである。しかしながら、これらの話をはじめたのは懺悔話というより正確には、「身の上のおそろしき、人をだませし事ども」なのである。それはどういう意味をなすか。次節で述べたい。

五、まとめにかえて — 西鶴と大坂新町の遊女 —

遊女たちは、「百物語」の後、勢いついでに話した「身の上のおそろしき、人をだませし事ども」と零落させた大尽たちについて回顧したの続き、

誠に此年月、いやといはさぬ仕掛、其人も此客も、あるほどは取うしない、世にある身を捨てさせ、其後は文してさへとひもやらず。ある夜は、忍びて門に立る、佛を、知ぬ顔に通り過、申かはせし入癩子いれぶくろも、今の勤めの邪魔になると、もぐさの煙に焼うしない、俄に紋所を染つぶし、親の所はいふまい物と悔み、其時くに替るは、此流れのならひとは云ながら、懇したき時はうらなく、命も其男には惜からざりしに、心から心の鬼の物すごく、独々涙に沈み、しばし身をふるはして嘆く時、

と我ら遊女に心底より恋し、入れ揚げた結果零落したにもかかわらず、そのような零落した人々を忘れ去ろうとする「心の鬼」に涙を流す。そのとき、

天井のうら板ひゞき渡り、屏風ふすまもなりやまず、四方の角より青雲落重りて、今申出せし人達のあさましき姿、幻に顕れ、「少は恨に思ふ身を、何とて見捨給ふぞ。日比の偽りかへすぞ」と、はなちたる爪・黒髪、日帳も、いらぬと嘆きつくる。是におそれて、思ひくの侘事あはれすれども、家の内の荒る事あはれやまず。中にも物かしこき女良考へて、「各揚屋の算用残りは」と、声高に申せば、現にも世中は、借錢程すかぬ物はなきにや、此聲聞と、化したる形、消へうせけるとぞ。

と怪奇現象が起り、意外な結末を迎えるのである。

「今申出せし人達のあさましき姿」とあるが、前節で述べた大尽たちのうち、店の金に手をつけた「長堀の木さま」

は死罪となつたと考えられるので死霊であろうが、彼以外は生き霊の可能性が高い。その死霊・生き霊に取り囲まれておののく遊女たち。ところが、その化け物に向かつて、「物かしこき女良」が「各揚屋の算用残りは」と声高に言う。「化したる形、消へうせける」というのである。

ところで、その言い放った遊女はなぜか「ふてきない人」ではなく、「物かしこき女良」なのである。西鶴が大尽たちの幽霊を退散させた遊女を、「百物語」をも恐れない肝の太い遊女ではなく、「物かしこき」遊女としたことは注目できる。

遊里にはきまりがある。遊女が「金」目当てであることは、客も納得づくでなくてはならない。このことは遊里遊びの根本原理なのである。ましてや当時、日本で最も栄えていた大坂の地に遊郭を構える大坂新町である。それだけに最も洗練された遊里として、客の方も「金」の問題を離れた「粋客」でなくてはならないのである。

大坂新町を舞台とした当時の「遊女評判記」の白眉に『難波鉦』<sup>（ななわじら）</sup>「延宝八（一六八〇）年刊」がある。この書は、特に「諸分泌伝もの」といわれる手管の解説書類の集大成とでもいうべき内容をそなえた作品である。中野三敏氏<sup>（10）</sup>が「『難波鉦』出版後」それから二年後には、同じ大坂で西鶴の『好色一代男』が出板されるので、西鶴がこの書を見なかつた筈はない。」とされるように、西鶴の地元、大坂新町の遊女に関する知識は経験に基づくものもあろうが、このような書物から得る知識も多かつたであろう。その『難波鉦』「張落 土佐」には、つぎのような話が書かれている。

おとこのいわく「なにと土佐殿。もはや我等も久しう通ふたが、馴染むに従い、女郎といふ物は、何とも益体<sup>やくたい</sup>も性のしれぬものじや。嘘ばかりぬけ〜といふて、不頼母<sup>ぶたのも</sup>しな物じや」とさ「あらたまりた事を言わんす。最早秋風がたちましたそな。いかにも乗り代へたい時は、其様にいわずと、誰になりと会わさんせや。傾国は鬼ではあるまじ、人でござんす。偽りばかり言ふといわんすけれど、何が嘘でござんした。言ふて見さしやんせ。」



折々の挨拶話は、客の気によりての事でござんす。川竹の卑しい者でござんすれども、心中づくになりては、命をも捨て、指切、爪放し、髪も切ります。たのもしきことではござんせぬか。いづれも秋風時分には手をよふいわんすことなれど、我身はそれほど客に事欠きませぬ。もはやおゐてくださんせや。あ、面憎」とある。男は別れ際になると遊女は偽りばかりというが、遊女というものは卑しいものではありませんが、本当に相手の男を好きになれば、「命をも捨て、指切、爪放し、髪も切ります」頼もしいではないですか。さあ、どうせ別れたいのでしよう。もう来ないでくださいよ。という遊女の言い分である。

『諸艶大鑑』の場合、この遊女土佐の心意気は十分に活かされている。「あさましき姿」となって、遊女たちの前に現れた零落した大尽たちは「少は恨に思ふ身を、何とて見捨給ふぞ。日比の偽りかへすぞ」と「はなちたる爪・黒髪、日帳も、いらぬ」と暴れるわけであるが、これは遊女としては捨てておけない大尽側だけの言い分なのである。

遊女にしてみれば、「金」を媒介としながらも、大尽といい仲であったときには真実相手を愛し、心中立てとして「はなちたる爪・黒髪」などを贈ったのである。媒介である「金」がなくなつたのは大尽の算用違い、愛したことを今になって「偽り」などと言われる筋合いではないのである。なるほど手練手管を使う遊女の心に「心の鬼」はあつても、同時に遊女も「鬼ではあるまじ、人でござんす」なのである。

そこで遊女の言い分として「物かしこき女良」が代表して「各揚屋の算用残りは」と叫んだわけである。この叫びは、遊里通いの金科玉条、「金」があるという基本条件を疎かにして大尽への怒りの叫びではなかつたかと考える。また、これこそ活況を呈す経済の中心地大坂で鍛えられた大坂新町の遊女の信条であり、真骨頂なのである。

もつとも、これは特殊な遊里だけの論理である。そこで西鶴は「現にも世中は、借錢程すかぬ物はなきにや」と普遍的な論理もあげているのである。これが後の『日本永代蔵』や『世間胸算用』のような町人物につながることは言うまでもない。ついでながら、先見性という点では零落する大尽の哀しさを描くという方法そのものは、『椀久一世

の物語』『西鶴置土産』等につながっているといえよう。

西鶴は遊女たちの遊びにはそぐわない、武士たちの話遊び「百物語」という小道具をタイトルとすることで、読者を作品内に引き込み、遊女のありのままの心意気を見せつけた。遊女が主人公となる『諸艶大鑑』では必要な手続きであった。西鶴第一作『好色一代男』よりやや長めの『諸艶大鑑』を読ませる一つの方法だったのかも知れない。大きな課題である。また「百物語」という怪異と遊女の関係についても『諸艶大鑑』には存外怪異を種とした話が多い。この点も論証すべきである。ここでは、巻二の五のみを視座としたが『諸艶大鑑』全体での検証を課題として結びとしたい。

## 註

- (1) 頼原退蔵・暉峻康隆・野間光辰編著『定本西鶴全集』中央公論社 一九五一年刊では『好色二代男』とする。
- (2) 拙稿「『諸艶大鑑』研究史」高田衛・有働裕・佐伯孝弘編『西鶴と浮世草子研究 第二号 特集「怪異」』笠間書院 二〇〇七年刊所収。
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 『中村幸彦著述集第四巻』中央公論社 一九八七年刊。
- (5) 西鶴は、都市伝説ともいえる怪異現象として、『好色五人女』〔貞享三（一六八六）年刊〕巻二で大坂天満の「七つの化け物」を描いている。しかし、これを狐狸の類の仕業として、為政者をはばかったことはかつて論じた。「新・大坂学講座」（産経新聞／関西2100委員会主催。講演内容は二〇〇五年六月十一日朝刊十五面掲載）及び、拙著『西鶴浮世草子の展開』（和泉書院 二〇〇六年刊）所収、第四章第三節「年をかさねし狐狸の業ぞかし」考―西鶴と出版統制令に関する一考察―』『諸艶大鑑』では、噂話ながら、怪異現象としている点が注目できる。この差はほんの数年で西鶴が大坂の作家から全国版の作家となったためと考えているが、さらなる論証を行いたい。
- (6) 『西鶴と浮世草子研究 第二号』笠間書院 二〇〇七年刊。付録浮世草子全挿絵画像CD 寺敬子担当『百物語評判』による。

- (7) 『西鶴と浮世草子研究 第一号』笠間書院 二〇〇六年刊。付録西鶴浮世草子全挿絵画像CD 平林香織担当『諸艶大鑑』による。
- (8) 富士昭雄・篠原進・浅野晃校注『諸艶大鑑』『新編西鶴全集 第一巻』勉誠出版 二〇〇〇年刊。
- (9) 拙稿「第I部 第4章 近世海運ルートと文学のへ道」西鶴文学の情報ルート」田中きく代・阿河雄二郎『へ道』と境界域 森と海の社会史』昭和堂 二〇〇七年刊所収。
- (10) 中野三敏校注 酉水庵無底居士作『色道諸分難波鉦』岩波文庫 一九九一年刊。中野三敏氏解説による。

※なお、テキストは『対訳西鶴全集二 諸艶大鑑』（明治書院）を用い、送りがな等適宜改訂した。

——文学部教授——